

家庭に於ての子供に關した節約に就て

青山女學院教頭 塚 本 は ま

多勢の子供を育て、まゐりました経験から私はただほんの自分の子供の爲に種々考へました事をお話し致します。

學齡前の時代

よく世間では、「子供が着物をよよす」と由します。がそれは子供が丈夫でいたづらがはげしいからなのでそれを汚さない様にと云ふのは云ふ方が無理なのでございますから、私はよよしてはすぐ洗へる方法を用ひました。勿論此頃はエプロンはどなたでもお用ひになる事と思ひますが、その下に「上つぱり」を著せます。この「上つぱり」も單衣になさる方もございますが、どうも下であげがゴロゴくしたり、ひつぱれたりして遊びにくく、あり着心地がよくない様と思ひますので、「上つぱり」は裏表とも洗濯のきく布地で造た衿にして、下着には少し古いのも柔かい地質を選んで、あげや何かもおろしてしまつて著せ

ます。たとへば幼稚園に通ひはじめ頃の子供で申しますと「上つぱり」は前申した様な裏表とも洗濯のきく布でこしらへ下には一ツ身の小さくなつたのを、肩あげや腰あげを下して著せまるとゆき丈もそのまゝで大方間に合ひ子供もあそび易くてよい様でございます。

どこの地方でも一般にと希むのはむづかしい事でございますが、今は色々の方面から子供の衣服としてまづ一番よいのは洋服でございます。又日本でも西洋でも子供の大きくなるのは同じ事であつてどちらのお母さま達も、どういふ様にして衣服を大きくつくらうかと云ふ事を考へて居ります。それについて西洋のお母さん達は色々面白い工夫をされて居ります。

御参考の爲にあげてみますと子供はまづ目立て大きくなるのが背丈でございますから初めての時には裾の、みかへしをのはして裏へ地の布を補ひます。

次の時にはスカートを下下に切つてその間にレースを入れるとかリボンを入れるとか又他の細い有りきれでもあればそれを入れたりして、それを一段又は二段も致しますと優に五寸の丈はのばせることになります。

叔丈の次には胴廻りでございますがそれも胴のバンドの處を左右に切つて（一處でたりなければ幾所にも）其間へ違た布を調和よく（新しいのをわざわざ買ひませんでも大人の服の裁ちはちでも、何なりと有り合せた布を使って）縫ひ込めば思ふ様にのばす事が出来ます、その上工夫次第で却て面白いものが出来ます。

次に首の廻りの小さくなつたのをどうするかと申しますと、肩明きから袖口へかけて眞直に、「ゆき」の處を切てしまひます、そしてそこへ、夏ならばレース、冬ならばビロード又は斜布其他何なりと有布を利用して適宜に縫ひ込みますと、首の廻りと、袖巾と兩方を一度に大きくする事が出来ます。

洋服だからと申して新しい布でなければ裁てないと云ふのではなく、あちらのお母さま達は、お父さんのツボンの破れた處をきり取つたり、古い上衣の

丈夫さうな處をよつて切り取つたり、そしてその布を上手にミシンではぎ合せて身頃を造り、カラやカフスにビロードをつけるとか有合せの新しい布を使用するとかして容易にそして巧みに節約利用をされて居ります。そしてかうした服の上には、やつぱりエプロンをかけます。

それから特に食事の時には、それは私が子供にさせたのでございますがナブキン代りとして、手拭を長いまゝ片端だけを首の形に切りぬいて首の後で一寸ボタンで止めるようにしたのを用ひさせました。

手拭で致しますと洗ふには容易であり、之を食事の度毎にテーブルの上に備へて置きますと著物をよごさぬ上に清潔でもあると思ひます。

又子供は殊にハンカチーフを落し易く、ポケットに入れたつもりで何時の間にか飛出して無かつたり致しますのでそれにはエプロンのポケットに小さい「ち」をつけておき、ハンカチーフには長いテーブルを結びつけて（顔や頭の汗を拭いたり、鼻をかむのに充分届く長さの）此のテーブルをポケットの「ち」に、しつかり結び付けて、テーブルごとハンカチーフをポケットに入れさせますと滅多に落す憂はありません。

落さないこと云ふ事は經濟的によいかしでなく、ないから他人のを一寸借りるといふ様な事がなくて衛生上にも整頓の上にもよいと思ひます。

それから子供には箆筒の一番下の引出しを與へて、色々な洗濯した物を一齊、足袋が何枚、ハンカチーフが何枚と數をして渡して自分で其の中へ仕舞はせます。自分で自分の始末を致しますから、多勢の世話に人手がはぶけます。手のはぶけるのは、やはり節約の一つであります。たゞ箆筒にかぎらず家庭内の、抽出し類の何でも一番下のものを子供の分として置きますと、子供には却て出し入れが仕やすくてよいと思ひます。そして各自に必ず名を記して置きますと、私のように忙しく外出勝ちであつても、子供達が自分で自分の物の整理をよく致します。

經濟思想と云ふまでの事ではなくとも何事も子供自身で事をさせるように習慣つけることをつとめます、たとへば、ハンカチーフやはな紙を渡しますのにも、毎朝出がけに渡すのでなく、一週の始に、何枚何枚渡しますよと云て渡しますと、なくした時にも、「月曜に何枚いたゞいたものが一枚たりないから」と云て、はつきり報告するようになり、何時、な

くなつたか何枚なくなつたかもしらずに居ると云ふ様な事はなくなりません。はな紙にしても、一日分づつに摺んで六たゞみを渡して置きますと自分でそれを整理して使ひます。

又まる四歳、丁度幼稚園に行きはじめる頃から、「お靴磨き」と云ふ事をさせます。子供は、わざと水溜や道わるには入りたがる癖がありますが、それが自分で磨くとなると、大變よごし方がちがひ、いたみ方も違ふわけでございます。又あみあげの靴の紐も小さい時から獨りで結ばせますが、時には兄さんと、どつちが早いかなど、競走したりして、面白い中に、時間の經濟といふ事の習慣も作られます。

小學校時代

經濟思想と申しますが、勞力や金の價值といふ事については小學校時代になつてから考へさしました。たとへば「此郵便は出してもよいのだが、近い所だから歩いてお届けしていらつしやい、そしたら其の切手代の三錢を貯金出来るでしよ」と云ふ様にして主にはじめは、小包とか手紙とか又昔の事で鐵道馬車時代したから「母さんは他にも御用があるので

馬車で行きますが、あなたはさほど遠くもなしするから歩いてごらんなさい兩方から廻りつこをしませう、といふ様にして馬車賃を貯蓄させたりしました。が扱その貯蓄したお金を、どう利用するかと申しますと、一つには、山陸の海嘯のお話を學校で聞いたとか、大變可哀さうな困てゐる人の事をきいたとかした時を機會に慈善なことに使はした事もございましたが、折角子供が勞力して貯蓄した金錢なのですから、その子供自身の趣味とか興味とかに適應して、その子自身面白いと思ふ事の爲に或は物の爲に使はせました。たとへば幻燈だとか青寫真だとか又玩具の材料の類をかける爲の色絲とか、舟を造る木材などを買はせたり致しました、今なら寫真機械なども結構でございます。

中等學校時代

も少し大きくなりましたして小學校から中學、高等女學校位の年齢になります（主として女兒にさせました）ごく簡単な家計簿記法を教へて、文房費がどの位、娯樂費がどの位と、なるべく子供に近い事からから、子供の興味を起させる様に注意しながら、

ノートを一冊あたへて、まづ初は簡単な記入だけを致させました。も少しして高等女學二三年位からは家計簿記を全部つけさせます、それから四年以上五年になりますと一家の會計を全部あづけます。収入も、そつくり渡して現金であつたら銀行に預け、どれ丈を手元におき何の支出はどれ丈と云ふ實際の事を自分で致させます。簿記の方の事は主に女兒に致させましたが、男女を問はず中等學校の二年以上になりましたら、一家の豫算をたてます時の相談會の一員として加へます。學資がいくらに修繕費がいくらと申すと兄が、今年には修學旅行が遠くなつたのでこれ／＼の旅費が要ると云ふ、ではお父さんの外套の新調を次へのばして置かうと云ふことになり、新調のはづの妹の靴が修繕だけで充分だと云ふので、では小さい兄さんがオバシウスが悪くなつたと申し出したからその方の費用にまわしませうとか夏近い時には姉が衣服の方が豫想外にはぶけたから、二週間毎年行く處を今年はもう十日だけのばしませうとか、お互に話し合ふ様に致させます、まわ豫算會を家庭内で公開したと云ふ様なわけで夕食後いつもより少しお菓子でも多く用意して一家の者が心持よく

語り合ふと云ふ様に致します、こゝには團欒のよろこびもあり又子供達が各自、身分不相應な事を考へないようになりませう。

この會合は大抵十二月のはじめと六月と一年に二回ほど開くように致しました。

經濟のことについてはこれ迄はあまり多く考へられてまゐりませんでした、一家の平和もその家の家計が能く行てゐるか否かが主なる原因をなし國としては戰爭の本が多く經濟的の事であることから見れば國の平和世界の平和も國家の經濟にまつ處多く、かように子供の中から經濟思想を養はふとし實行させようとするのも其の根元は皆が平和に行きたいと云ふ願からであります。(文責在記者)

煤掃は己が棚つる大工かな

(芭蕉)

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、畫が出来る。

人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない。矢張り向う三軒兩隣りにちら／＼する唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて、越す國はあるまい、あれば人でなしの國へ行く計りだ。人でなしの國は人の世よりもなほすみにくからう。

住みにくき世から、住みにくき煩ひを引き抜いて、有難い世界をまのあたりに寫すのが詩である、畫である。あるは音楽と彫刻である。こまかに云へば寫さないでもよい。唯まのあたりに見れば、そこに詩も生き歌も滿く。(艸枕より)

○豫 告

十二年一月號から、萬國幼稚園協會案出の、「幼稚園要目」を掲載致します。

日々に新に、日々に創造の時代にある、我國現代の幼稚園界によき参考となるべき事を信じます。